
すごい科学で守ります！ 霊一鬼との戦い

草薙 正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すごい科学で守ります！ 霊一鬼との戦い

【ISBN】

254680

【作者名】

草薙 正人

【あらすじ】

『やうにす』『科学で守ります！』で語られた『爆虫戦隊ムシレンジャー』…もし、それが実現していったなら…

■一鬼対ショコケンジャー（前書き）

先に書いた小説では、『すゞかが』のみとし、『もひとつ』や『さら
に』を含めていませんでしたので、今回は、それらも含めてみまし
た。

霞一鬼対シユリケンジャー

「ハリケンジャー」と疾風流の忍風館には、旋風神がある。これでは、せつかく、御膳試合のために育てた息子たちも敗れてしまう。他人に、「残忍」などと呼ばれてもいい。忍の世界は、勝つか負けるか…生きるか死ぬか…それが全てだ。私のやっているのは無益な殺戮ではない。先見を持つて効率良く仕事をしているだけだ。その先見でわかる。我らゴウライジャー…迅雷流の迅雷義塾にも、旋風神に対抗できる何か兵器が必要だ。」

老師グルとの接触、霞一鬼にとって、それはチャンスだった。

「コイツの言つてることが本当だとすれば、S・P・Uがまた何か兵器を作る」とになるだろ？「コイツに、S・P・Uを紹介し、その上で、「密かに警備を手伝つ」などと言つて開発情報を聞き出せばいい。」

老師グルは、霞一鬼の思惑通り、S・P・Uと接触し兵器を開発、開発情報も霞一鬼へと流れた。

だが、その兵器を奪おうと忍び込んだ霞一鬼を待っていたのは、思わぬイレギュラーだった。

「これ以上忍者を汚すのはやめろ…」

「誰だ？」

「私の名は、シユリケンジャーだ。」

「聞かぬ名だな。S・P・Uの者か？」

「関係無いと言えば、嘘になるが…」

「まあいい。『ウライジャーの力を試すいいチャンスだ。知つているか？昔、S・P・Uもまだできてない頃、たつた独りで闘つていた戦士がいたらしい。それを模して造つてみた強化服だ。見てきたわけじやないから、色々、差異はあるだろうが…』

そう言つて、霞一鬼は、ホツパライジャーへと変身した。

「では、知つているか？その戦士が闘いながら感じた孤独感を…洗脳された改造人間殺してしまつたという心の痛みを…人間でなくなりた悲しみを…」

そう言つて、その男は、ある姿へと変身した。

その男がその話をしたのは、あの3番目の戦士だったからなのか、それとも、あの3番目の戦士が宇宙刑事になつた際の同僚だったから…そなのは誰も知らない。

その勝負は一瞬で終わつた。

「まだやるか？私は、ニンジャ・オブ・ニンジャだぞ？」

「クソ…」

霞一鬼はそこを去つていつたが、これが後に、重大な事件をもたらすこととなる。

「ハア…ハア…シユリケンジャーか…恐ろしい力があるものだ。私には、まだ力が足りないらしい。」

霞一鬼は、息子たちのもとからも去り、独り修行を続けた。

2002年、宇宙忍群ジャークアンジャーの侵攻が開始され、ハリケンジャーの3人が闘つようになる。

その後、霞一鬼の息子たちもハリケンジャーに加わり、5人とシユリケンジャーの力でこれを倒す。

そして、この勝利の裏には、暗黒七本槍が霞一鬼の誘いに乗り裏切つたという理由があった。

霞一鬼は、この暗黒七本槍を連れ、勢力を上げるために、宇宙へと手を伸ばす。

爆虫戦隊ムシレンジャー

時は流れ、2004年、S・P・Uの協力で、ジャマールへ対抗するため、爆虫戦隊ムシレンジャー（ビーファイター）が作られる。

ブルービートをリーダーとした3人のムシレンジャーは、超甲神（轟雷神）や超大甲神（天空轟雷神）を操り、ジャマールと戦った。

超大甲神の協力な力と3人のチームワーク…ジャマールの侵攻を阻止するのは難しくはなかつた。

しかし、突然現れたオンという不穏な輩により、苦戦することとなる。

どこで知ったのか、オンは、超甲神や超大甲神の構造を完全に把握しており、手のうちに読まれ倒されてしまった。

ジャマールへの対抗手段を一つ失つたのは大きかつた：

そして、それに追い討ちをかけるかのように、ブルービートのクローンであるシャドー（ブラックビート）が作り出される。

オンの幹部の一人がジャマールへ協力し、ジャマールの幹部ジャガールがかつての悪を蘇らせ、ムシレンジャーの劣勢が続いていた。

ムシレンジャーの指揮をとる老師グルは、その息子である次元商
人カブトの人脈を駆使し、ジャンパーソン・レスキュー・ポリス・ジ
ライヤを呼び寄せる。

ジライヤは、互角以上の能力を持つオンの幹部の動きを止めるこ
とに専念し、他のジャンパーソンやレスキュー・ポリスの面々は、ジ
ヤグールの蘇らせた者たちと戦つっていた。

その後、レスキュー・ポリスの長官である正木俊介の指揮の下、オ
ンは壊滅するが、ジャグールの悪の再生は続き、ジライヤもオンの
幹部を倒せないままでいた。

均衡の状態が続いていたが、ジャグールがオンの首領を蘇らせた
瞬間からそれが変わる。

オンの首領は、ジャマールを乗つ取ろうと、ガオーム・ギガロ・
シュヴァルツ・ジェラ・ジャグールを暗殺し、ジライヤを抑えるた
めにジライヤと交戦中のオンの幹部と使えそうなシャドー（ブラック
クビート）を残し、ジャグールの新たなる首領となる。

しかし、ジライヤと交戦中のオンの幹部は、「ヤツを守る義理は
無い」として、ジライヤとの戦いを中断し、シャドー（ブラックビ
ート）をも連れ、どこかへと消えた。

オンの首領は、ムシレンジャー・ジャンパーソン・レスキューポリストと互角に戦うが、駆けつけたジライヤや宇宙刑事たちの協力により、敗れていった。

「…フツハハハハ、悪が多く死んだ…この私が殺した者もいる。これだけのエネルギーがあれば…」

オンの首領は、笑いながら、自身の右手を高く掲げた。

「私は、様々な宇宙人に技術を教わった…中でも、興味を持ったのが、巨大化技術…多種多様な方法があるため、これを組み合わせていけば…」

オンの首領を闇が包む。

闇は、誘われるかのように宇宙へ飛び、オンの首領は、そこで巨大化を開始した。

忍術による巨大化やアイテムによる巨大化など、巨大化を繰り返していく、巨大な化け物を作った。

それは、超大甲神や慈雷神宇宙刑事の持つ巨大ロボでも敵わなかつた。

「何が「正義は…」…」

しかし、そのとき…

ヒーローたちの奇跡か（はたまたS・P・Hが規格統一していたのか）、その3つの巨大ロボットが合体する。

その奇跡の力の前に、オンの首領は敗れ、ムシレンジャーの長か

つた戦いも終わった。

爆虫戦隊ムシレンジャーVSハリケンジャー

ジャマールに協力しジライヤと互角の闘いをしたオンの元幹部：「ヤツは、私の攻撃を止めた…」

彼は、自身の力を試すために…自分の力がオンの首領を超えていたかどうか試すために…オンの首領の果たせなかつたシユリケンジャー抹殺を目的として動きだす。

オノの残党を集め、その中についたトリノイド第0号サウナギンナンの能力を使い、新勢力を作ろうとしていた。

ついには、忍術を使い、宇宙警察地球分署の基地であつたデカベース（その基地内にあつたデカレンジャー口ボ・デカウイングロボ・デカバイクロボなど）を奪つた。

彼の思惑通り、真っ先に動いたのは、「忍術を駆使した犯罪」ということからハリケンジャーであつた。

デカベースを月に置き、月にあつた人類の基地をも利用し、巨大な要塞を作り上げる。

その巨大な要塞を前に、ハリケンジャーは苦戦し、援護に駆けつけたムシレンジャーでも、それを落とすことはできず、ムシレンジャーとハリケンジャーは、撤退を余儀なくされる。

地球上に、帰った彼らを待っていたのは、日向おぼろと星川竜と天宮勇介のコスモアカデミア関係者であった。

ハリケンジャーは、星川竜に新たな忍術の修行を受け、日向おぼろと天宮勇介は、アースアカデミアにて旋風神と超大甲神（天空轟雷神）の解析を行っていた。

そんなとき、アースアカデミアが襲われる。

襲つたのは、サウナギンナンによつて蘇つた大教授ビアスとドクター・ケンプとサー・カウラーであつた。

天宮勇介は、レッドファルコンとなり、それに挑む。

大教授ビアスとサー・カウラーの息の合つた攻撃、そして、友を殺したくはないという葛藤からレッドファルコンは苦戦するが。

闘いの中、人間の心を取り戻したドクター・ケンプは、大教授ビアスとサー・カウラーとともに死んでいった。

日向おぼろにより、大甲神（轟雷神）は新たに改造され、重甲神（轟雷旋風神）や超重甲神（天雷旋風神）という合体ができるようになつた。

その頃、トリノイド第0号サウナギンナンは、エヴァオリアンを復活させようとするも、オンの元幹部により止められてしまつ。

サウナギンナンは、オンの元幹部を殺すため、オンの首領を蘇らせる。

「ここは……なるほど……また、蘇つたわけだ。」

「これで私を殺すつもりか？……まあいい。これで確認できる。」

オンの元幹部は、オンの首領に攻撃をしかける。

「グツ……」

オンの首領を殺そうとしたオンの元幹部の攻撃は止められず、オンの首領は倒れる。

「バカが。以前と同じように避けられるとでも思つたか？さつわと、出ていくがいい。」

「サイボーグとなつてゐるのに気付かないとは……どちらがバカかな？」

倒れていたオンの首領による不意の一撃により、捕らえられる。

「ここは、お前の組織だ。お前を慕い組織にいる者もいることだらう……今お前を殺せば、私が裏切りにあつ。さすがに、この組織はそのまま使いたいのにな。」

「では、どうするつもりだ？」

「敵との戦闘に行かせることも考えたが……全滅させれば、敵は消え組織の意義も無くなり、お前が倒されれば、士気も上がつただろうが……裏切られれば、より邪魔な存在となるだけだ。どこでも好きな場所へ行くがいい。」

そして、ムシレンジャーとハリケンジャーは……新たな忍術の力で次々と敵をなぎ払い、超重甲神（天雷旋風神）によつて月へと乗り込んだ。

だが、基地を護るレーダの操るデカウイングロボを相手にしている最中、オンの首領がスーパー^デカレンジャー^{ロボ}を起動させる。

2体の攻撃を前に、超重甲神は押されていたが、そのスーパー^デカレンジャー^{ロボ}に異変が起きる。

「お前は…何故、ここにいる？」

「何を言つてはいる？「どこでも好きな場所へ行くがいい。」と言つたのは、貴様だろ？私には、シャドー^トといういい部下がいる。ここへの潜入などたやすかつた。」

オンの首領は殺され、スーパー^デカレンジャー^{ロボ}は、デカレンジャー^{ロボ}とデカバイク^{ロボ}に分離し、デカバイク^{ロボ}は、そのままどこかへと消えていった。

デカレンジャー^{ロボ}やデカウイング^{ロボ}は倒され、闘いは終わつた。

…と思われていた…

爆虫戦隊ムシレンジャー vs アバレンジャー

ムシレンジャー（ビーファイター）の活躍が始まる以前の2003年、地球には、アバレンジャーといつ戦隊がいた。

ハリケンジャーの協力などもあり、アバレンジャーはその敵エヴオリアンを倒すことに成功する。

しかし、時を置いた2005年、トリノイド第0号サウナギンナの力で、全てのエヴオリアンを新生エヴオリアンは復活してしまう。

それを率いたのは、かつてのオンの首領であった。

オンの首領は、かつての闘いで生き残ったトリノイド第0号サウナギンナンによって蘇っていた。

オンの首領にとつて、「地球は、もはや、侵略する価値も無い星であり、ただの邪魔な星」でしかなかった。

地球…そして、別次元の地球全てを終わらせるため、地球に月を落とすことを計画する。

邪悪な者の集まる地球の崩壊、宇宙にとっては、望まれたことであつたのかもしれない。

そして、それを阻止するために、ムシレンジャーも活動していた。

ムシレンジャーとアバレンジャーの共同戦線、そして、その奇跡の合体を前に、新生エヴォリアンたちも押されていった。

オンの首領も諦めていなかつた。

オンの首領は、自身の右手を高く掲げ、巨大な化け物となつた。

ムシレンジャーとアバレンジャーの攻撃すら効かないオンの首領の前に現れたのは、あのシユリケンジャーであつた。

その力によつて、やつと、オンの首領を抑えることに成功し、月を落とすことを計画は止まつた。

だが、オンの首領の最期の力か…

月に置かれていた『テカベース』が地球へと発射された。

ムシレンジャー、アバレンジャー、シユリケンジャーは、それを止めに行きたかつたが、オンの首領を抑えるにはそこを離れるわけにはいかなかつた。

「何が『正義は必ず勝つ』だ…勝利に必要なのは、力だ。」

そんなとき、赤く燃えながらも、デカベースを追う謎の機体があつた。

その機体は、大気圏内でデカベースに追いつき、その中へ入ると、それをデカベースロボへ変形させ、オンの首領へと攻撃した。

オンの首領は倒れ、ムシレンジャー・アバレンジャー・シュリケンジャーの攻撃により、死亡した。

デカベースロボは、無理な動きをしたためか、その場で崩壊しながら月へと落ちていった。

爆虫戦隊ムシレンジャー→Sアバレンジャー（後書き）

オンの幹部：

モデル（というか、元ネタ）は、の方です。まあ、他にも少しモデルいるんですが、おおかたの方です。だつて、声が：もう少し、の方の活躍も書いてみたい気持ちもあるのですが、悪の勝利を書くわけにもいかず、正義として書いたとしても、たぶん償いの歴史になるのでしょう。まるで、ターンのよう。そんなのは、の方らしくないので、やめておきます。（H? 今も十分ある方らしくないですか？ いえ、あくまで元ネタですか？ 「＝」 だったら、出生からしておかしいでしょう。）

爆虫戦隊ムシレンジャーVSアバレンジャーVSハリケンジャー

トリノイド第0号サウナギンナンの力で蘇った新生エヴォリアン…
オンの首領という指導者は失ったものの、新生エヴォリアンたちはそれを待っていた。

デズモゾーリヤの復活。

復活したデズモゾーリヤは、自身をこの地球へ送ったクビライの再生を開始させる。

それを阻止するべく、アバレンジャー・ムシレンジャー・ハリケンジャーが動き出すこととなり、謀らずも、ダイノアース・ムシアース・アナザーアースの戦隊が集結することとなつた。

だが、デズモゾーリヤには秘策があつた。

かつて、ある者が捕らえていた数名の宇宙刑事たち…それらを洗脳し、兵として扱つていた。

殺すわけにもいかない相手に苦戦している隙に、デズモゾーリヤはクビライの復活を成功させる。

「ほう…そうか…お前が蘇らせたのか…新たな次元を創り出すことに成功したようだな?」

「次元の構造を理解しているクビライなればこそその素晴らしい計算。感服する限りです。」

「Jの星はいい。面白いところだ…Jの実験を多様すれば、この星は滅ぶだろうが、資源が尽きることなどありはしない。憎き宇宙警察も、もはや、我が手中…全ての次元はいただいた。」

しかし、彼らは、背後から近づくシャドーに気が付いていた。実験で勝手に生み出された存在の苦しみなど、お前達にはわかるまい。」

シャドーは、宇宙刑事たちの洗脳の解除方法をムシレンジャーたちに伝えると、クビライとの戦闘を開始させた。

デズモゾーリヤとクビライは倒され、長かった戦いは一応の終わりを見せる。

爆虫戦隊ムシレンジャー→Sアバレンジャー→Sハリケンジャー（後書き）

一応、区切りがつくところまでいったので、少し休みます。

まだ、宇宙刑事の戦いなどを書くつもりですので、もう一方にキリが付くか、仕事の方が終わるかしたら再開します。

宇宙刑事 宇宙警察地球分署

時は流れ、2004年、S・P・Uと銀河連邦警察の協力で、アーレの封印が解けたことや新たな異次元侵略軍団ジャマールやエヴォリアンに対処するため、宇宙警察地球分署が作られる。

しかし、アレやエヴォリアンの侵攻は止められ、ジャマールにはムシレンジャー（ビーファイター）という対抗勢力が完成していたことから、宇宙警察地球分署は、ブルースワットの一件などで宇宙警察でも危険視されてきているエイリアンに対抗する組織となつた。

エイリアンの犯罪者たちは、アリエナイザーと名付けられ、スワントやドギーと現地の5人の宇宙刑事により取り締まりが行われた。

だが、組織など無かつたと思われていたアリエナイザーに組織が存在した。

それは、宇宙へと手を伸ばした霞一鬼によるものであった。

組織の名は、隠密から「オン」と名付けられ、暗黒七本槍を幹部とし、それまでの闘いで取り残された悪の宇宙人の残党たちを集め、組織を形成しながらも、アブレラの人脈を使い、なおも組織を大きくしつづけていた。

オンの誕生、それは、ブルースワットの一件が関わっている。

ゾーンやバラノイアなど、悪の宇宙人の残党たちはそれなりにい

たが、霞一鬼の納得する数ではなかつた。

そこで起きたのが、クイーンとブルースワットによる闘い。

この闘い、S・P・Jなどには、「クイーンとブルースワットが相打ちとなり双方死亡」と記録されているが、それは、その勝者が披露しきつたところを暗黒七本槍により暗殺されていたためであつた。

クイーンのエイリアンは、捨てられるほどの数・人間社会に潜入できる能力と、霞一鬼の望んだままのものであつた。

アリエナイザーの能力は様々なものがあり、組織でなくとも、宇宙警察地球分署の刑事たちを苦しめていたことである。

エリート宇宙刑事であるデカブレイクが加わつても、その戦況が変わることはなかつた。

それを重く見てか、ついに、宇宙警察は、伝説と化した宇宙刑事（ギャバン・シャリバン・シャイダー・アランの4人）を出動させる。

宇宙警察地球分署の者たちは、アブレラ率いるオンの兵士やオン以外のアリエナイザーと戦い、4人の宇宙刑事は、暗黒七本槍と戦つた。

戦況は変わり、オンの劣勢となり、「ここは引いて、もう一度勢力を暖めなおすべきでは?」暗黒七本槍の中には霞一鬼に進言した者もいたが、「…お前のような、暗黒七本槍のなりそこないに何が解る? 奴らには…いや、シリケンジャーには…もう逃げはしない」と言つて、聞き入れようとはしなかつた。

「かつて、あなたは、「忍の世界は、勝つか負けるか…生きるか死ぬか…それが全て」と語り、私はそれに賛同して、あなたに力を貸した。しかし、今のあなたは、私怨で組織を動かし、目の前の敗戦が見えていない。」

「また、裏切るのか? 利害が違つなら、勝手に出て行くがいい。」

霞一鬼を殺そうとした暗黒七本槍の攻撃は止められ、その暗黒七本槍はオンから出ていくこととなる。

その後、アランの地球での人脈から、地球の警察との間に一つの

戦線が張られ、オンは壊滅する。

霞一鬼はそれでも死なず、再び、ある宇宙刑事の前に現れる。

「何故、生きている?」

「…宇宙刑事に仮面ライダー…いや、バード星の強化服にサイボーグ技術か…お前がサイボーグかどうかはしらないが、強化服を上手く利用していることは明らかだ。…ならば、それを超えるためには?」

「まさか…」

「そう、私は、強化服を着たサイボーグとなつたのだ。お前たち4人の宇宙刑事が来てからの私を「私怨で組織を動かしている」など

と言つた者もいるが、オンを作ったときから、これが目的だつた。宇宙にある様々な技術を集めるには最適なものだつた。

「…生身の体を失つたのだぞ？」

「私にとつて、勝利こそ全て。そんなものは必要ない。」

「…お前とは、宇宙刑事としてではなく、シコリケンジャーとして相手をしよう。」

そう言つて、その宇宙刑事は、ジャッジメントを破壊した。

その勝負は一瞬で終わつた。

「もう終わりだ。」「勝利こそ全て。」と言つなり、正義でいるべきだつたな。正義は必ず勝つんだ。」

宇宙刑事　宇宙警察地球分署（後書き）

宇宙刑事たちの活躍をメタルヒーローシリーズで…と思つたのですが、メタルヒーローシリーズのためか、その時代の宇宙刑事ばかり書いてしまい…デカレンジャーファンの方すいません。

宇宙刑事 宇宙警備隊

地球を救つた伝説の四人の宇宙刑事たち…

彼らは、それぞれの事情で、宇宙警察地球分署から離れることがなる。

シャリバンこと伊賀電とシャイダーこと沢村大は、自らの部下の警備隊に異変が起きたことを知り、地球を去る。

その異変は、霞一鬼の率いたオンの残党たちによるものだった。

シャリバンとシャイダーの活躍で、その異変は収まるが、その頃、地球では、他のオンの残党により、宇宙警察地球分署の基地であるデカベースが強奪される。

シャリバンとシャイダーは、急いで、地球へ向かうが、それを邪魔する者たちが現れる。

誰が蘇らせたのか、それは、霞一鬼と5人の暗黒七本槍だった。

5人の暗黒七本槍は、自らを「暗黒戦隊オンレンジャー」とし、シャリバンとシャイダーに襲いかかる。

シャリバンとシャイダーは、その攻撃を防ぐことには、成功した。

「下がっている。力の再確認には、いい材料だ。それに、シユリケンジャー＝宇宙刑事が明らかとなつた今、重要な餌でもある。」

霞一鬼は、笑いながら、自身の右手を高く掲げた。

その右手を中心に霞一鬼を闇が包む。

闇は大きくなり、そして、巨大な化け物へと変わる。

その化け物の前では、一人の攻撃も通じることはなかつた。

そして、化け物は、霞一鬼の姿へ戻る。

「私は、地球へ帰つていいく。あの場所に、その二人を閉じ込めておけ。それは、重要な餌だ。」

霞一鬼は、その二人を暗黒戦隊オレンジジャーに任せて、そこを去つていった。

しかし、つかれたのか（不意を付かれたのか、この闘いでエネルギーを使い疲れたのか）、霞一鬼は、その地球で死んでいった。

宇宙刑事 宇宙警備隊（後書き）

ショリケンジャー

この物語では、その正体を宇宙刑事の残りの一人のどちらかとしてるんですが、他にもまだ仮説がいろいろあるんです。詳しくは、『さらに』を…

さて、その正体がどちらかなんですが、どちらとも、有力な説なので（天下無敵のヒーローとくれば、この一人でしょう。）、2パートーンの小説を書こうと思っています。書く暇があればですが。

宇宙刑事 シュリケンジャー・ギャバン

バード星と「テンジ星の子供…まあこ、「正義のために産まれた存在」とでも呼ぶべきか。

彼は、自身の闘いにキリがついた後も、正義のために…自分の正義を貫くために、修行を重ねた。

しかし、自身の正義と宇宙警察の方針の違いの結果、彼はジャッジメントを破壊してしまい、バード星に呼ばれ、地球を離れることとなつた。

ジャッジメントも、その殺害を許可したのであらうが、彼には、悪に一瞬でも希望を「える気はなかつた。

彼くらいの者となれば、通常であれば、ジャッジメント無しの判断も許される…だが、そこは、宇宙警察地球分署の置かれた地球、宇宙刑事が宇宙警察のルールを守れないのでは威儀にも関わる。ましてや、ジャッジメントを破壊してしまうなど…

友人であり、彼と同じく伝説と化した宇宙刑事の一人であるアランもそれに同席した。

アランの助言もあり、彼に対する罰は軽かつた。

そんなとき、ある事件を耳にする

伝説の宇宙刑事2人の失踪。

彼とアランは、その調査に向かうが、その手がかりは「つこうに見つからなかつた。

彼とアランは、その事件の関係者と思われる霞一鬼の捜索を試みる。

そんなとき、霞一鬼は、暗黒戦隊オンレンジャーの捕らえてきたサウナギンナンによつて蘇つていた。

霞一鬼は、サウナギンナンを殺すと、暗黒戦隊オンレンジャーに彼とアランを招かせる。

餌の効果か、彼とアランは、罠とわかつつも、そこへ言つた。
「お前の部下…暗黒戦隊オンレンジャーとかいゝのは、仲間に引き受けでもらつた。」

「ああ、こちらとしても好都合だよ。」

どこからともなく聞こえる霞一鬼のその声とともに、罠が発動し、2人は別々の場所へと落される。

「悪の力に吸収したからか…お前たちには、両方借りがある。お前たちを倒して、最高の力を証明しよう。そこにある道を行くがいい。お前たちには、懐かしき道だ。」

彼は、暗く細い道を進んだ。

そこで彼を待つてたのは、ハンターキラー・ヘッダー指揮官・ヘドラー将軍の3人であった。

「懐かしい暗い道…お前は何を悪とする？お前の強さは師を超えているか？力のみで正義が示せるなら、勝利の後、何故、こつも地球

は何度も狙われた？「

彼はそれと闘い、勝利する…が、彼の心は疲弊しきっていた。

アランも闘いを終えたのだろう、彼と合流し、霞一鬼の前へ立ち「これで終わりか？それとも、まだ、ドクトルGでも用意しているのか？」と言つていた。

「いや、ドクトルGはいなげ、お前にはうつてつけの相手がいる。…お前たちの闘いを見てわかつたのだ。宇宙刑事ギャバン、いや、青梅大五郎、お前がシュリケンジャーだ。この私と闘つてもらおう。」

「

霞一鬼の言葉とともに、アランのいた床が開き、アランはその中へ落ちる。

「…うつてつけの相手を用意しておいた。お前にそれが、殺せるかな？」

そこにいたのは、ガルマジロンというデストロンの改造人間であった。

「さあ、始めようか。お前の力は見事なものだ。お前のその忍法、シャリバンにでも習つたのか？それとも、ジライヤか？まあ、どれでもいい。お前は、それを超えている。さあ、もう一度、シュリケンジャーとして闘え！」

その勝負は一瞬で終わった。

「もう終わりだ。正義は必ず勝つ…望み通り、シヨリケンジャーとして闘つた…さあ、宇宙刑事たちのところに案内してもらおう。」

「…くそお。何が正義だ…」

「確かに、お前の仕掛けは参考になつた。『何が、正義で、何が、悪か』など、所詮、結果だ。だが、もう無駄な抵抗はやめておけ！巨大化する手段も絶つたんだ。」

「…それで…その程度で…諦めるとでも思つたのか？宇宙刑事アランに、ガルマジロンを用意したように、お前にも一つの用意はしておいたものがある…これだ。」

そこにいたのは、ボイサーだった。

「肉体的には本物だ。しかし、その体は、大サタンに取り付かれている。サウナギンナンに蘇らせたジャグールの協力あつてこそ。そして、大サタンの望むままにその肉体を強化してある。行け、ボイサー！」

霞一鬼の命令とともに、ボイサーは動き始める。

彼は、そのボイサーを切り裂いた。

「…『何が、正義で、何が、悪か』など、所詮、結果だ。…ならば、俺は、自分の信じた正義を貫く。…今は、眠らせることしかできないが。今の自分の判断を俺は信じる。」

宇宙刑事 シュリケンジャー・ギャバン（後書き）

宇シリケンジャー＝ギャバン説

ギャバン説の有力な点としては、その変身が宇宙刑事であること。（ただ、これは、アランとかの「彼が宇宙刑事であった」というのを示す証拠にしかならないのですが。）

そして、変装した人物たちの中にいなかつた点。これこそ、その証拠だと思われます。（「変装した人物」ではないがゆえにその中にいなかつたわけです。）

宇宙刑事 シュリケンジャー・アラン

仮面ライダー・戦隊・宇宙刑事…全てに繋がった男がいた。

彼は、平和を守るとともに、自分と同じようにサイボーグとしての苦しみを味あわせないための行動も行っていた。

しかし、それゆえに霞一鬼がサイボーグ化したことを自分が招いた結果を感じたのだろう。

彼はジャッジメントを破壊してしまい、バード星に呼ばれ、地球を離れることとなつた。

彼くらいの者となれば、通常であれば、ジャッジメント無しの判断も許される…だが、そこは、宇宙警察地球分署の置かれた地球、宇宙刑事が宇宙警察のルールを守れないのでは威儀にも関わる。ましてや、ジャッジメントを破壊してしまはうなど…

友人であり、彼と同じく伝説と化した宇宙刑事の一人であるギャバンもそれに同席した。

ギャバンの助言もあり、彼に対する罰は軽かつた。

そんなとき、ある事件を耳にする

伝説の宇宙刑事2人の失踪。

彼とギャバンは、その調査に向かうが、その手がかりはいつもに見つからなかつた。

彼とギャバンは、その事件の関係者と思われる霞一鬼の捜索を試みる。

そんなとき、霞一鬼は、暗黒戦隊オンレンジャーの捕らえてきたサウナギンナンによつて蘇つていた。

霞一鬼は、サウナギンナンを殺すと、暗黒戦隊オンレンジャーに彼とギャバンを招かせる。

餌の効果か、彼とギャバンは、罠とわかりつつも、そこへ言った。どこからともなく聞こえる霞一鬼のその声とともに、罠が発動し、2人は別々の場所へと落される。

「悪の力に吸収したからか…お前たちには、両方借りがある。お前たちを倒して、最高の力を証明しよう。そこにある道を行くがいい。お前たちには、懐かしき道だ。」

彼は、暗く細い道を進んだ。

そこで彼を待っていたのは、テニスの陣太郎・戦士鉄の爪・鉄人仮面テムジン将軍の3人であった。

「お前の力を見せてもらおう。その正体を見せてもらおう。」

再生怪人などと闘い慣れた彼はそれと闘い、勝利する。

ギャバンも闘いを終えたのだろう、彼と合流する。

「これで終わりか？それとも、まだ、ドクトルGでも用意しているのか？」

「いや、ドクトルGはいないな…お前たちの闘いを見てわかつたのだ。宇宙刑事アラン、いや、風見志郎、お前がシユリケンジャーだ。この私と闘つてもうおつかれさまでござります。」

霞一鬼の言葉とともに、ギャバンのいた床が開き、ギャバンはその中へ落ちる。

「…宇宙刑事ギャバン、お前にはうつてつけの相手を用意しておいた。お前にそれが、殺せるかな？」

そこにいたのは、ボイサーであつた。

「さあ、始めようか。お前の力は見事なものだ。お前のその忍法、カクレンジャーにでも習つたのか？それとも、星川竜か？スーパー戦隊に通じた男だ、どうとでも考えられる。まあ、さすがに、比喩的意味でうたわれた忍者ライダーには習つてないだろうが…どちらもいい。お前は、それを超えている。まあ、もう一度、シユリケンジャーとして闘え！」

その勝負は一瞬で終わつた。

「まだやるか？霞一鬼、お前の忍術は対したものだが、日本じゃあ

…」

「…私は、2番目。1番は貴様とでも言つのだらう？」

「前にも言ったが、私は、ニンジャ・オブ・ニンジャだぞ？…お前は、最低の忍者だろうな。私のせいで力を手に入れられなかつたためか、力に対しても貪欲になつた。『欲は身を崩す。』忍者の基本だろ？」

「…くそお。私が最低だと…」

「確かに、腕だけなら、2番目と認めんでもないが…力に溺れたな。本当に、忍の世界に生きるのなら、無駄な鬭いなど望まないはずだ。もうこれ以上は無駄だとわかるだろ？もう、諦めろ！」

「…それで…その程度で…諦めるとでも思つたのか？宇宙刑事ギヤバンに、ボイサーを用意したように、お前にも一つの用意はしておいたものがある…」これだ。」

そこにいたのは、ガルマジロンだった。

「お前は、私が力に溺れサイボーグとなつたとしていたな。そして、その一因となつた自身に対しても怒りを覚えていた。お前のせいで、サイボーグとなつた者や死んでいった者など大勢いる。ガルマジロンがいい例だ。他にも、お前が組織を潰さなければ、總統Dなども死ななかつただろう。お前は、救つた人間の数より、殺した数の方が多いのだ。お前に、このガルマジロンが殺せるかな？行け、ガルマジロン！」

霞一鬼の命令にとともに、ガルマジロンは動き始める。

彼は、その動きを止めることしかできなかつた。

そのとき、突然、ガルマジロンを切り裂さかれる。切り裂いたのは、ギヤバンであつた。

「…惑わされるなーお前は、これまで人を救つてきたんだ。それを

殺してなかつたら、何千人という人間が死んでいた。
ろしたわけじゃない。」
殺したくてこ

宇宙刑事 シュリケンジャー＝アラン（後書き）

シュリケンジャー＝アラン説

まず、『デザイント』がのズバット準備稿に近い点。（手裏剣をイメージしたのでしきうが、ここまで似てると、少なくとも、スタッフが与えてくれたヒントにしか思えません。）

武器の名も、シュリケンズバット。（いや、「～の」という意味の「～ズ」であり、「シュリケン（シュリケンジャー）」のバット」という意味なのでしきうが、スタッフの誰かツツ「ミミ」そのものでし、ここまでズバットとくると、わざわざバットにしたのも、この名前にするためと思えてきます。）

暗黒戦隊オンレンジャー vs スーパー戦隊

2人の宇宙刑事を基地まで案内した暗黒戦隊オンレンジャーは、そこでその2人に襲いかかる。

そのとき、S・P・Uが遣わせた謎のスーパー戦隊が現れる…

それを率いたのは、2人の宇宙刑事どちらとも共闘したことのあるミドレンジャーこと明日香健一であった。

その明日香健一とともに、ダイナブラックこと星川竜・チエンジペガサスこと大空勇馬・イエロー・オウルこと大石雷太・ニンジャレッドことサスケの4人がそこにはいた。

「例え、悪の戦隊であろうと、この2人の前で、偽の戦隊を名乗るとは…お前たちなど、俺たち5人で十分。どこからでも来るがいい。」

暗黒戦隊オンレンジャーを5人に任せ、2人の宇宙刑事は、暗黒戦隊オンレンジャーの指揮をとつた霞一鬼のもとへと向かつていた。

「…お前たちでいいのか？縁が率いたなんて聞いたことがないし、戦えない者もいるのではないか？」

「ああ、俺のことか？星川さんに頼んでコスモアカデミアでドロンチエンジャーの代用品を作つてもらつたんでな。この通り、スーパー変化 ドロンチエンジャー！」

「そうではない。年齢的に戦えない者もいるだろ？それに、バカなやつだ。変身できないと思わせ、油断をさそう」ともできただろうに。」

「試してみるか？GO！行け、二回転ヒーメラン！」

「拙者も続かせてもらおう…分身クロスカッター！」

「他人の技だが、ネオスライサー！」

「くらえ、レッドスライサー！」

複数のブームランが、暗黒戦隊オンレンジャーを狙う。

「効かぬな。忍術を学んだ我らに、分身や変型手裏剣など、効かぬ。」

「

「クッ…なら、ゴレンジャー・ハリケーン！」

「行け、カクレンジャー・ボール！」

「これのどにが効くというのだ？こんなもの、ただの爆弾だろ？？」

「レツ・ツ・チ・エ・ン・ジ　チ・エ・ン・ジ・ペ・ガ・サ・ス！ただの爆弾？確かに、さつきの使い方ではそれと同じだろ？…しかし、それぞれのアースフオース、いや、アースを入れていくことで、その力は増すことになる。見るがいい…エンドボール・カクレンジャー・ボール　レディーGO！」

「…そんなこと聞いて、避けないとでも思つたのか？」

「ブラックスター・フラッシュゴー！」

ダイナブラックの曰くらましにより、暗黒戦隊オンレンジャーは動けなくなり、その間に全員にバスが回った。

「ペガサスズーカ！」

「スマッシュボンバー！」

二つの爆弾とともに、同時撃ちされた銃のエネルギーにより、暗黒戦隊オレンジジャーは倒された。

2人の宇宙刑事がガルマジロンやボイサーなどを倒し、霞一鬼を捕らえて戻ってきたのは、その頃であった。

「暗黒戦隊オレンジジャーまで倒されたのか？」

「さあ、もう、諦める。」

「行つたはづだ。「好都合」と。これだけの負のエネルギーが貯まれば、また、巨大化できる。」

「ギャバン・ダイナミック！」

「逆ダブルタイマー！」

巨大化しかけた霞の体は、2人の攻撃で、両腕を失うこととなる。

「お前には、もはや、シリケンジャーといつ敵はいない。もう一度、1から自分を見つめなおすんだな。」

暗黒戦隊オレンジジャーVSスーパー戦隊（後書き）

もつすべ、終わらしそうです。一応、一段落つきましたし。霞、少し可哀想ですが。

邪甲・ビークラッシャー

一億年の眠りから目覚めたマザーメルザードによる侵攻…かつてのムシレンジャーと新たな戦士たち…彼らを総称して、ビーファイターといふ名が与えられた。

ビーファイターを最も苦しめたのが、猛毒鎧将デスコーキオン・冷血鎧将ムカデリンガー・魔剣鎧将キルマンティス・変幻鎧将ビーザックのビークラッシャーであった。

しかし、シャドーに率いられ、組織を離反し、邪甲・ビークラッシャーを組むこととなる。

その頃、誰が再生をしたのか、邪命戦隊エヴォレンジャーや暗黒戦隊オソレンジャーが地球を狙っていた。

彼らは闇の意志に反し、それらを倒していく。

彼らは、ビーファイターと一緒に戦闘を行うが、何を考えたかシャドーはそれを引かせた。

「何故ですか？」

「わからぬか？…考えてみる、エヴォレンジャー や オソレンジャーなど、過去に死んだ者たちが蘇っているのだ。邪魔な存在が増えているのは、目に見えている。闇の意志よりオレを選んだのだろう？」

ならば、来い。面白い闘いを見せてやる。」

シャドーがそれを率いたのは、闘いがしたかつたからではなかつた。

かつて、殺したソレが再び蘇るのを感じたからであつた。

誰が蘇らせたのか、ドン・ホラーと魔王サイコと大帝王クビライ…
そして、メスやゾーンといった宇宙侵攻組織。

かつて殺したその因縁の復活…

シャドーは、それを終わらせたかつた。

宇宙刑事などの助けもあり、クビライに近づくことができた。

しかし、クビライも同じ相手に負けることはなかつた。

シャドー、そして、ビークラッシャーたちは、その力の前に倒れていいく。

そのとき、シャドーの前に姿を現したのは、ビーファイタードアつた。

いや、他のメンバーは、メスやゾーンを足留めしてこたのだろう。
そこには、ムシレンジャーであった。

シャードーを含む6ビーストクラッシュヤーは、自身のエネルギーをムシレンジャーに「与え、贈つについた。

邪甲ビーコンクラッシュ（後書き）

次で終わりです。

爆虫戦隊ムシレンジャーVSスーパー戦隊

力に溺れた者…霞一鬼。

その霞一鬼に出会つたことで力に溺れた者がいた。

その名は、ジャグール。

彼は、人知れず、復活し、次々と、悪を復活させ、それを吸収していった。

その邪命戦隊エグオレンジャーや暗黒戦隊オシンレンジャーなどどこかへ行つてしまつた者たちもいたが、ダイダス・ラクシャーサなどの巨悪でさえ、彼の前へと吸収されていった。

力に溺れた者：

その末路とでもいうのか、エグゾス・百鬼丸・サタン・デズモゾーリヤまで吸収してしまつた彼は、力に意識を奪われ、ただどこまでも永遠に大きくなる巨大な邪心の塊と化した。

それを止めるために、魔法戦隊などの様々なスーパー戦隊が動き始め、爆虫戦隊ムシレンジャーもそれに加わる。

だが、スーパー戦隊のどの攻撃も、彼に効くことはなかった。

彼の攻撃にムシレンジャーが超甲神から振り落とされると、すかさず、それい乗り込む者がいた。

「私もこれに近かつたというわけか。轟轟としたイナズマを携えた神という意味から、轟雷神とするつもりだった。一度だけ名乗らせてもらおう。轟雷神の名を！」

「ダレだ？」

「私が…闇の光弾…シリケンジャー…私もこれと同じか…確かにそうかもしれん。私は目の前の勝利だけに目が行き、息子たちの戦闘にも加担できなかつた。脱走して来てみたかいがあつた。私にあんな処罰は生温い。」

「タツタ、1体、ノミで、ドウする、とイう、ノだ？」

「私の罪は消えることはない。お前はこの力を知つてゐるだらう？」

私は、悪のエネルギーを吸えるのだ。大回転轟斬り！」

彼は、これまで吸収したものを奪われ、プラントアックスに斬られ倒された。

「まだだ。…まだ終わらない。私が悪のエネルギーを吸収したのだ。これを処理しなければ…突貫轟車突き！」

カブトスピアーガシリケンジャーを貫いた。

「シリケンジャーの死…それがやつと見れるとは、皮肉なものだ。

」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5468c/>

すごい科学で守ります！ 霧一鬼との戦い

2010年10月15日20時15分発行